学生が考える宇和海沿岸域の

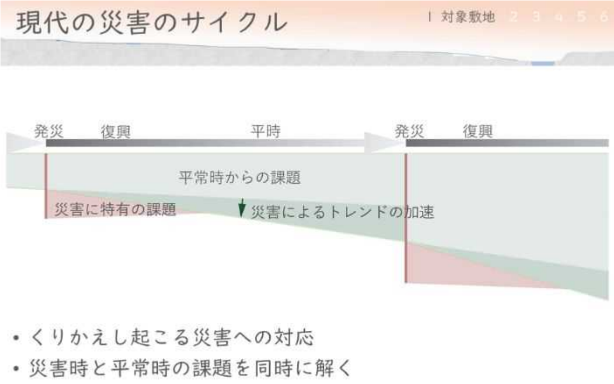
小さな事前復興プランの提案（ビデオ発表）

遠まわりするまち
（西予市野村町）

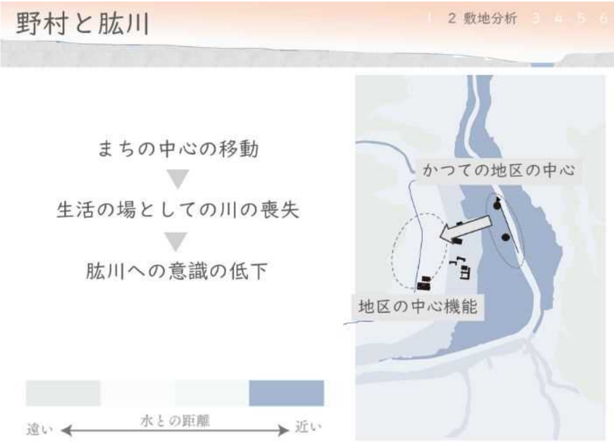
東京大学院生：佐鳥蒼太郎・岡村壮真・北島萌絵
中岡桃子・福田曉子

私達の班は，建築２名，社会基盤１名，都市工学２名の計５人で構成されています。メンバーがそれぞれの専門を活かして町のマスタープランから建築のスキルまで幅広い提案をしました。西予班の対象地域は，西予市野村町の中心市街地です。野村町は，2018 年の西日本豪雨に伴って洪水が起こり大きな被害を受けました。私たちには，この洪水という災害からの事後復興計画が課題として与えられました。提案のタイトルである「遠まわりするまち」には堤防を作り，土地を嵩上げするといった直接的な対応するのではなくて，あえて人と街との距離を再び近づけることでゆっくりとまちづくりを進め，繰り返し起こる災害に備えつつ魅力的な日常生活を実現したい，という思いが込められています。それでは西予班から「遠まわりするまち」と題して発表させていただきます。

私たちは，愛媛県西予市野村町を対象に，2018 年西日本豪雨の浸水被害からの復興の提案を行います。野村町中心部を流れる肱川の周辺エリアを「まちなか」と称し提案を行います。



私たちは，野村における水害が過去から繰り返し起きていることに注目しました。水害は災害特有の課題を起こしますが同時に地域における課題も増幅します。そのため，今回の提案では，災害時の課題だけではなく，平常時における課題も同時に解決していく必要があると考えました。

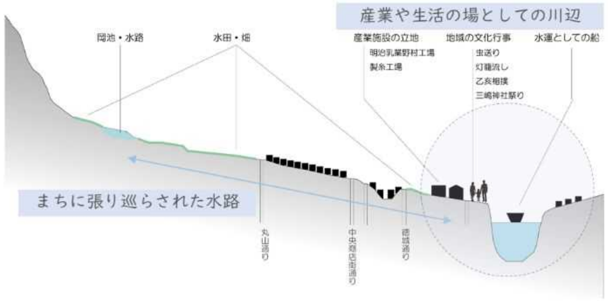


私たちは，災害時・平常時に共通する課題として，肱川の意識のしにくさがあると考えています。かつて，川沿いには産業施設が立地し，また祭事の場でもありました。しかし，現在はバイパスの開設に伴い，まちの重要施設も西側に移動し，生活の中心が

川から離れています。そのため，多くの人は日常的に川を意識しにくくなったと考えられます。川は，日常的に“いこい”などの恩恵をもたらしてくれる一方で，非常時にはとても危険なものとなります。この川の危険性を意識できる空間を整備する必要があると考えています。

かつての肱川の役割

1 2 敷地分析 3 4 5 6



一方で，水辺空間は人々のコミュニティの中心として機能する可能性も秘めています。野村のポテンシャルである肱川を生かし，かつてのように自然と人が集うような空間が作れないかと考えました。

遠まわりするまち

1 2 3 コンセプト 4 5 6

これらの考えをもとに，私たちは野村を特徴づける“水”を中心とした復興まちづくりを提案します。大規模な嵩上げを行ない，水から離れていくのではなく，災害時にも平常時にも“水”が人々の生活の中心となる計画です。ゆっくりと時間をかけて遠まわりするまちを作ります。

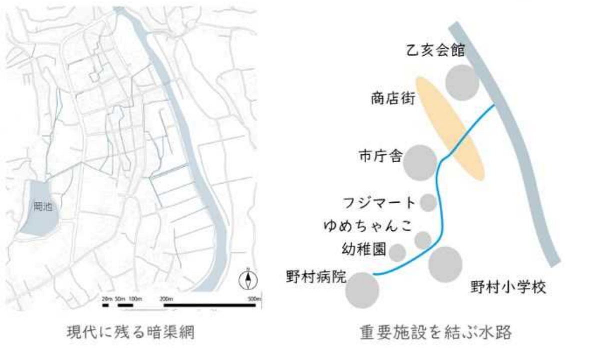
施策の方針

1 2 3 4 施策の全体像 5 6

この計画は，大きく三つの施策から成り立ちます。

かつての水路の復活-水路の整備

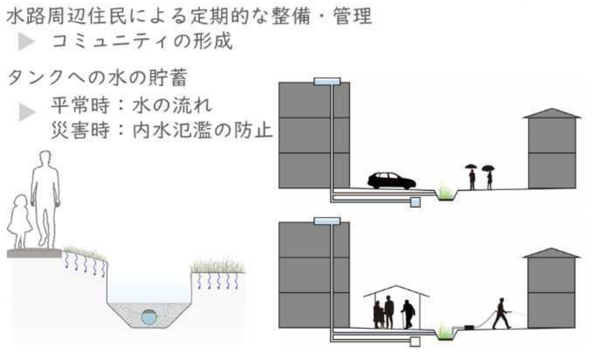
1 2 3 4 施策の全体像 5 6



一つ目に，街のシンボル空間となる水路の整備です。かつて野村に張り巡らされていた水路を復元します。それらのうち重要施設周辺の水路をメイン水路と捉え，復興の拠点と定めました。

水路の利用と管理-水路の整備

1 2 3 4 施策の全体像 5 6



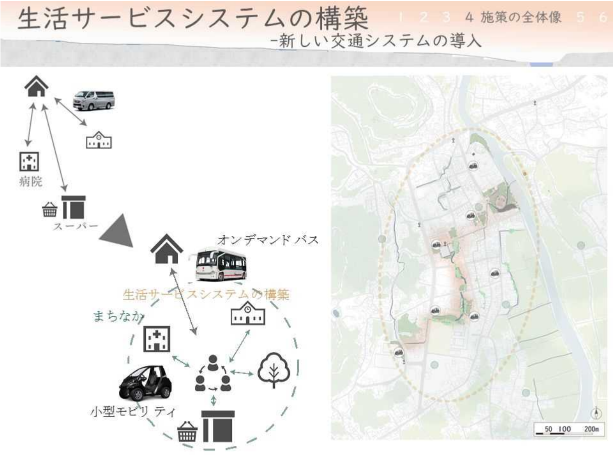
この水路の断面イメージは，こちらになります。歩行路は，災害時に避難路として機能します。そのため，雨水は道路に流れ込み，水路下部に設置された排水管で処理されます。さらに，肱川反対方面の標高の高い道を避難路と定めています。これらの水路は，平常時は住民による管理が行われ，コミュニティ形成を促進します。また，重要施設上部にはタンクが設置され，災害時の内水氾濫防止の役割を担います。

まちなかの重要施設-居場所づくり

1 2 3 4 施策の全体像 5 6

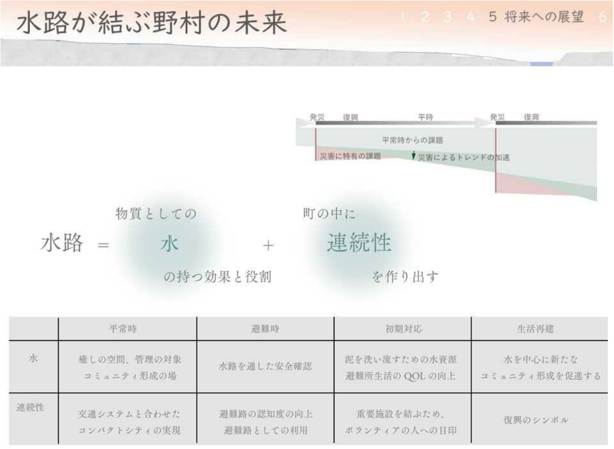
二つ目に居場所づくりです。水路沿いの重要施設には，住民の居場所となる空間を設けます。それぞれの施設において，水路を生かした空間づくりを計画します。

また，町会ごとにある集会所は，今後利用方法や空間の改正により住民間の多世代交流を促進します。



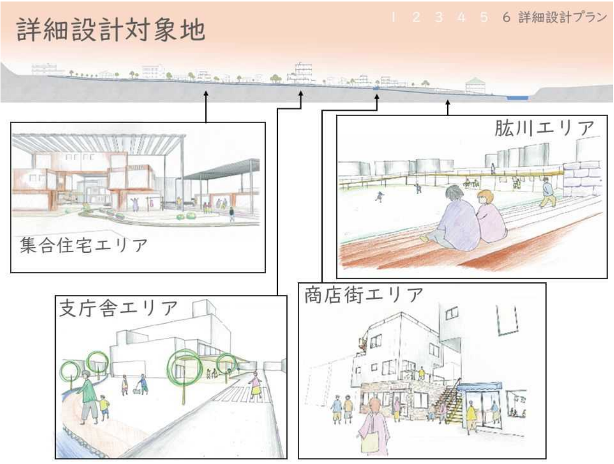
最後に，新しい交通システムの導入を検討します。公共交通を改善し，生活サービスと結びつけることにより生活サービスシステムを構築し，“まちなか”での活動を支え，コンパクトなまちづくりを推進します。

以上のような施策を通じて，こちらのような全体像を描いていきたいと考えています。

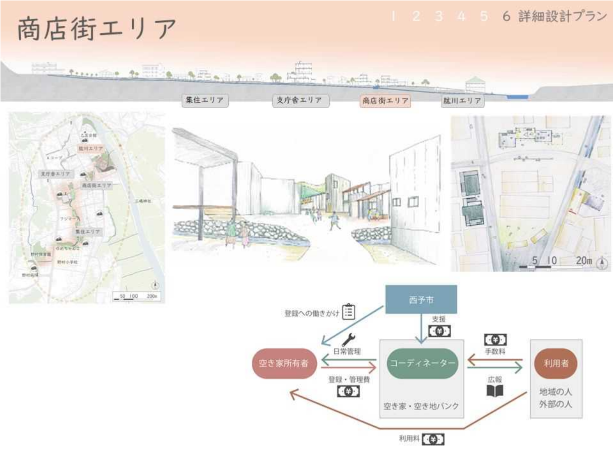


	平常時	避難時	初期対応	生活再建
水	癒しの空間、管理の対象 コミュニティ形成の場	水路を通した安全確認	泥を洗い流すための水資源 避難所生活の QOL の向上	水を中心に新たな コミュニティ形成を促進する
連続性	交通システムと合わせた コンパクトシティの実現	避難路の認知度の向上 避難路としての利用	重要施設を結ぶため、 ボランティアの人への目印	復興のシンボル

新たに整備される水路を実現することで，平常時にはコミュニティを形成し，また，交通システムなどと組み合わせることで，コンパクトシティを作ることができます。
さらに，この計画は，平常時だけではなく，災害時にも効果を発揮します。災害発生後の対応を大きく 3 段階に分けて，この水路の役割を説明します。まず，発生直後の避難時には，水路沿いの道が避難路や安全確認をする場となります。そして，初期対応の時期には貴重な水資源として活用されます。最後に，生活再建時には復興のシンボルとなってくれることでしょう。
このように，平常時・災害時ともに，水路が野村とそこに住む人々を支えることで，人やまちと水との距離感が再構築され，水を中心としたまちづくりが加速していきます。



以上を踏まえ，主役となる水路に面した 4 つのエリアを抽出し，より細かな設計提案を行いました。



まず，肱川沿いのエリアについてです。ここは，今回の水害で深刻な被害を受け，被災した住宅の解体によって空地が増えています。そこで，町の歴史と水害の痕跡が残るこの場所に，災害の記憶を継承していく場としての運動公園を提案します。この運動公園は，町のシンボルである乙亥会館と連続しており，川沿いの一体的な利用を図ります。

南側の大きな広場には，乙亥会館へとつながるスロープ状のランニングコースを設けます。このスロープの下は，水害の記録を展示するギャラリー兼休憩所となり，公園を利用しながら水害の記憶を伝えていきます。さらに，公園南側の道路との間には，住民が気軽に立ち寄ることができるコミュニティ農園を作ります。

また，肱川と接する場所については堤防の高さを部分的に下げ，通りまでをなだらかに結びます。これにより，今まで疎遠に感じられていた肱川をより身近にします。

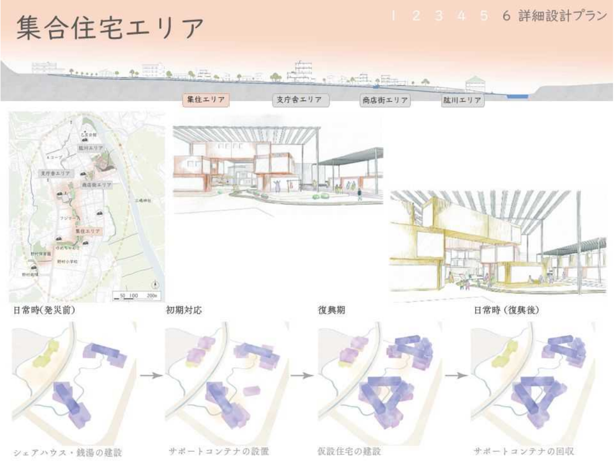
次に，商店街エリアです。このエリアでは，現在必要とされている“まちなか”の居場所と，今まで分かりにくかった避難路の意識付けをテーマとし，地域のコミュニティ拠点と新しい住宅の提案を行います。水と水路の交差点には，コミュニティ拠点を設けます。川の方から山の方へと連なる大小のたまり場は，住民の継続的・一時的な居場所となり，災害時に避難路となる東西方向の向きを日常的に意識させます。

新しい住宅では，住宅を包み込む階段が 1 階の店と 2 階以上での暮らしをつなげ，通りには生活が溢れます。階段は，隣人と会う場にもなり，普段から隣人への声かけを手助けします。災害時には，階段により緊急避難を可能にします。

次に，市庁舎エリアです。このエリアでは，現在野村支所の移転・改築が計画されています。今回はその計画を踏まえ，まちのモビリティの拠点となり，平常時も災害時もまちの中心となる新支庁舎を提案します。

平常時には，交通拠点を併設した市民に開かれた市庁舎として，人々が賑わう場となるとともに，来るべき災害に備え，広場と建物，モビリティを一体的に活用できる空間としました。

最後に，小学校周辺のエリアについてです。このエリアでは小学校や図書館に近いという立地を活かしながら，多世代の方がともに生活でき，災害時には仮設的な住まいとしても利用できる集合住宅の提案を行います。この集合住宅は，高齢住宅の建て替え，さらには仮設住宅からの移住先として想定しています。敷地内を通る大小の水路は，平常時は小学校などに訪れる若い世代と住民との交流のきっかけとなり，災害時には窮屈な避難所から外に出て世代やニーズごとに集える空間となります。



15のユニットは，拡張・縮小などの施工が容易なコンテナを用います。これにより，災害時の生活再建期には，需要に合わせてユニットを追加し，長期間使える仮設住宅とすることができます。

以上のように，野村町の資源である“水”を生活に引き込みながら，繰り返し起こる災害に備え，魅力的な日常の生活を実現する「遠まわりするまち」を提案させていただきました。